INTERVIEW
403人目
下

千人回峰

心に響く人生の匠たち

「千人回峰」というタイトルは、比叡山の峰々を千日かけて駆け巡り、悟りを開く天台宗の荒行「千日回峰」から拝借したものです。千人の方々とお会いして、その哲学・行動の深淵に触れたいと願い、この連載を続けています。

渋谷慶一郎

Keiichiro Shibuya

音楽家



音楽をやっている人以外にも興味を持ってもらえる作品づくりが大事

【代官山発】精神的にも常にフル回転の渋谷さんだが、音楽家として生涯現役を貫くため、ほぼ日課にしていることがあるという。それはヨガ。週に4〜5回、10時半から12時まではヨガスタジオで過ごしているそうだ。その時間は何も考えず、完全に頭を空っぽにできるところが大きな利点という。確かに、ただ運動をしたからといって頭が休まるわけではない。やはりクリエーターにとって頭のONとOFFの切り替えは必須であり、それが新たなものを生み出す源泉の一つになるのだろう。（本紙主幹・奥田芳恵）

父から影響を受けた社会心理学の視点

奥田　渋谷さんは、音楽以外のことはだいたい飽きてしまうとおっしゃいましたが、ご自身の会社の経営者であり、事務所の運営もされてこられました。そちらのほうはいかがだったのですか。

渋谷　今は経営の大部分はマネジャーに任せていますが、かつてはそうした仕事も自分でやっていました。でもこの仕事は飽きますね（笑）。ただ、経営的な部分の基準は単純で、全てのプロジェクトを黒字にすることが大事だと考えています。もし赤字のプロジェクトがあると、これで補填してとか、いろいろと計算するための時間を私が使わなくてはならなくなるからです。

奥田　本来の音楽活動に集中したいと。

渋谷　そうです。一般の方には、音楽家は音楽をつくってさえいればお金をもらえるようなイメージがあるかと思いますが、実際には、依頼されないと何も始まらないし、安価なものばかりだと仕事として成り立たないという現実があります。つまり、「音楽家の生活」と一言で言っても、それが実現するまでには、果てしない道のりがあるわけです。

奥田　確かに、それだけではビジネスとして成り立つかどうかは分かりませんね。

渋谷　私のやり方はそれとは違っていて、まずプロジェクトをつくるんです。そこにはコンセプトがあるのですが、音楽内的なコンセプトにとどまらずに、その時代の社会的なコンテクストも内包させて、さまざまな分野の人が入ってこられるようにしています。それが音楽を広げることにもつながり、現状の社会とか歴史的なコンテクストも含んだ作品をつくることで、そこに人を集め、お金を集めていき、自分たちもそれにかかった費用を関わったスタッフに払っていくというかたちをとっています。ただこれは、音楽業界の中では珍しいビジネスモデルだと思います。

奥田　そういうビジネスモデルを確立するにあたって、何か影響を受けたものはありましたか。

渋谷　私の父が社会心理学者だったと先ほどお話しましたが、大衆操作や戦時下におけるプロパガンダなどの研究をしていました。つまり、世の中の人は何に欲望を抱くか、何に扇動されるかということを研究していたわけで、私も多分にその影響を受けたのだと思います。だから、そういうことと音楽を組み合わせることは、自分の中で違和感はなかったですね。

奥田　そうしたお父さまの研究について、渋谷さんが直接触れる機会があったのですか。



PROFILE　1973年、東京生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。2002年、音楽レーベルATAKを設立。先鋭的な電子音楽作品からピアノソロ、オペラ、映画音楽、サウンド・インスタレーションまで、幅広い領域で活動を行う。東京とパリを拠点に国内外で作品を発表し、人間とテクノロジー、生と死の境界領域を作品を通して問いかけている。

構成／小林茂樹
text by Shigeki Kobayashi
撮影／長谷川博一
photo by Hirokazu Hasegawa
2026.9.25／都内のアタック・トーキョーにて

渋谷　父は大学の中にこもって研究しているだけではなく、週刊誌の取材にコメントしたり、テレビのワイドショーに出たりしていましたから、社会との接点がありました。そういう意味でも影響は受けていたんだと思います。

「PowerBook G3」の登場で自分だけの音楽制作が可能に

奥田　音楽制作にあたって、渋谷さんはさまざまなジャンルの専門家と関わりを持たれています。そうしたチームでやっていく場合、その良さと難しさがあると思いますが、その点どのようにお考えですか。

渋谷　私は良いことのほうが圧倒的に多いと思っています。この方法だと、科学者とかエンジニアとか他のアーティストとか、自分が一緒にやりたいと思う人とやれるわけです。音楽業界だけにとどまって活動するよりも広いフィールドで動けるということですね。

奥田　いろいろな専門家と一緒にやっていくためには、その分野の勉強も必要ですね。

渋谷　例えば、複雑系の研究をしていた東京大学の池上高志さんとは2004年に知り合ったのですが、彼と一緒に何かやりたいと思って、1カ月で複雑系の本を5～6冊読んだりしました。別に勉強が好きなわけではないんですが、必要なことはやらないと進まないので。

奥田　なぜ複雑系だったのですか。

渋谷　当時、私はコンピューターを使った音楽をやっていて、サイエンスの中でも複雑系というのは、コンピューターシミュレーションの最先端だったんですね。その分野で日本を代表するような科学者とコラボしたいというのは自然に生まれた発想でした。バイオリンの曲を書いたら、一番上手いバイオリニストに弾いてもらいたいと思うのと一緒ですね。

奥田　音楽制作に、そのコンピューターを取り入れようと思われたのはなぜですか。

渋谷　昔は、コンピューター音楽をやるためには大きな施設を持つ組織の中に入らなければできなかったのですが、1990年代後半に米Apple（アップル）が「PowerBook G3」をリリースし、完全にパーソナルなかたちで音をコンピューターの中でつくることができ、作曲もコンピューターの中でできるようになりました。

私は決まりの多い大きな組織に所属したくないので、自分一人で完結できる、このコンピューターを使った音楽制作に没頭するようになったわけです。

奥田　渋谷さんは、東京とパリを行ったり来たりする生活の中、実に多くのお仕事をされていますが、音楽制作にあたって枯渇する感覚を抱いたことはありませんか。

渋谷　つくれる量の限界はありますね。そのリミットを超えるとちょっとまずいですね。

奥田　寝ないでいいのならつくれると……。

渋谷　昔は何日もほとんど寝ないで制作していたりしましたが、もうこの歳だと無理なのでなるべく複数のプロジェクトが重ならないようにしています。

とはいえ、映画『ミッドナイトスワン』（2020年、内田英二監督、草彅剛主演）の音楽を担当したときは大変でした。1週間で2時間分の映画音楽をつくらなければならなかったからです。

奥田　1週間で！

渋谷　このスタジオのピアノで作曲して、マイクを自分で立てて演奏し、それをコンピューターに録音して、ということを順々にやっていくわけですが、そういうときは外の情報を一切遮断するわけです。もし外に出たら、コンビニでグミなんか見たら買って、そのままどこかに行ってしまいたい気持ちになってしまいますから（笑）。

奥田　グミで良いんですね（笑）。しかし本当に切羽詰まった心理状況ですね。

渋谷　これを超えたら危険というときには、本当に脳が痛くなります。

奥田　それだけ脳を使っているのですね。すごい。

渋谷　でも、終わってしまえばふつうに回復しますし、これまで締め切りに間に合わなかったことはありません。実は、ミッドナイトスワンのとき、当初はメインテーマだけを依頼されていたのです。でも、自分の名前が前面に出るからには、他の曲も別の人に任せるわけにいかないと思い、全部引き受けてしまいました。

奥田　楽をしようとか妥協しようということは、一切ないのですね。

渋谷　妥協したとしても、それは全部自分に跳ね返ってきますからね。

奥田　これからのご活躍も楽しみにしております。本日は貴重で楽しいお話、ありがとうございました。

こぼれ話



白いコンクリートのスクエアな造形と大きなガラスが特徴的なモダンな建物。そこに木々の柔らかさが調和し、都会的でありながらも落ち着きを感じさせる。今回は、渋谷慶一郎さんの創作拠点にお邪魔しての対談だ。

スタジオ内は、ピアノやシンセサイザー、PCなど多くの創作機器がありながらも、合理的に整然と配置されている。洗練された思考回路を少し覗き見ているようだ。キリっとした表情が印象的な渋谷さんだが、とてもユーモアがあり、そのスタジオは度々笑いに包まれた。

「一度も就職したことがないなんて、すごいですよね」と驚きと敬意を込めて話すと、「大変な時期もありましたよ」と渋谷さん。満足に買い物もできない時期があっても、アーティストであり続けるためのこだわりだったそう。それを「意地」とも表現されていたが、気骨ある生き方をしてこられたのだと思う。

音楽家と名乗り生きていくことができているのは、秀でた才能があったからというにはあまりにも簡単すぎる。信念を貫いて、やり通してきた結果、かつての渋谷さんの意地はしっかりとかっこいい強さに変わっていると感じる。

渋谷さんは、これまで誰もやったことがないことに幾度も挑戦してこられた。誰も正解を教えてくれず、近道を知らないことに挑む難しさがありながらも、新しいものを生み続けていくことには大きな価値があると言う。「ほんとに大変なんですよ」と言いながらも、AIをご自身の能力や作品の魅力を最大化してくれるパートナーのように使いこなしながら、決してAIに代替されない作品を生み続けていく。

すぐには解き明かせない音楽を一生の仕事に選んだことが、結果的に飽くなき探求心を生み、渋谷さんを新しい世界へ突き動かしているのだろう。自分をよく理解して最高の選択をされたことに、改めてその凄さを感じている。

新たな作品には、必ず渋谷さんらしさがあると言われるのだそう。「妥協は一切ない」と言い切り、極限まで突き詰める作品が生み出す究極の強みだ。シグネチャーサウンドがより代わりの利かない存在へと押し上げる。渋谷さんのおっしゃるとおり、全ては自分に跳ね返っている。（奥田芳恵）

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です



「ものづくりの環」の詩

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人――
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN
http://www.bcn.co.jp/